

おかげさまの聖地 歴史刻む



晩秋のモミジ、春のツツジ、そして初夏のアジサイ。基山町園部にある天台宗の古刹、大興善寺は、四季折々の植物をめぐることでできる山林植物園「契園」があることで知られる。

敷地面積は福岡市のヤフオクドームを上回る7万5千平方メートル。標高408メートルの契山の斜面に広がる園内に植えられたツツジは5万本、モミジは5000本とい、高低差を生かした重層



基山 大興善寺「契園」

こんな場所！

最寄りのJR基山駅からは、コミュニティバスの園部線で「小松」下車。25日までは西鉄の臨時バスも運行される。契園の入園料は紅葉、ツツジなどのシーズン中は大人500円、小・中学生300円。それ以外の時期はそれぞれ300円、100円。24、25日の午後5〜8時には契園のライトアップもある。問い合わせは大興善寺（0942・92・2627）。



赤く色づいたモミジが参拝客らを出迎える

的な景観が楽しめる。「森 ミングにひと工夫凝らした呼吸の道」「あなたの小 スポットも点在する。庭」といった具合に、ネー 奈良時代の高僧・行基が

717年に草庵を結び菩薩像を安置した。そんな起源が伝えられる寺を、神原玄應住職(83)は「伝統だけに頼るのではなく、どうすれば人が集まる寺として維持・発展できるか。歴代住職はそれを考え抜いてきた。その積み重ねの成果が契園なのです」と話す。

例えば、福岡県太宰府市の太宰府天満宮は、そもそも「安楽寺」という寺でもあった。しかし時代が江戸から明治に変わった1868年、新政府は神仏分離令を出し、これに端を発する「廃仏毀釈」が起きる。長きにわたって続いた神道と仏教の共存が崩れ、仏像や寺院の破壊など仏教弾圧の嵐が吹き荒れた。大興善寺にはこの頃、安楽寺から仏像が移された。

大正時代に入ってから、松林だった裏山の一角にツツジを植え始める。昭和の戦時中は、代用燃料「松根油」をつくるための採取などで松林が荒れ、枯れてしまったという。戦後にツツジ園を再開。荒廃と再興の繰り返しだったという寺の歴史は、時代の波にもまれながらも刻まれ、昨年、開創1300年を迎えた。

「相手や周りへの感謝、思いやりの精神は、良き縁に恵まれることにつながる」と語る神原住職の言葉を借りれば、ここは「おかげさまの聖地」なのだという。自然を楽しみながら、鳥居や神社も残る寺の歩みに思いをはせるのもいいし、住職の語る精神に触れるのも一興だろう。

(大野博)



赤いひもで掛けるハート形の「ご縁の絵馬」=いずれも基山町